

# 妙安寺だより 304号

## 散骨について

平成21年6月23日付けの朝日新聞に散骨の記事があった。遺骨を海や山にまく散骨が広がって、参入業者が増え、トラブルになる例が目立っている。そこで、統一ルールの法制化を求める声が、推進派、反対派の双方から上がり始めているという。自治体は、節度ある行為を求め、業者任せは困るといい、推進派は、自由な選択を求める保障を要求している。

散骨を求める者が多い背景には、無縁墓の増加や墓地の高騰を挙げている。

古来、遺骨は大事に扱い、丁重な態度で臨んできたのである。普通は墓に埋葬し、そこに霊的な存在を意識して、墓参したり、墓へ悲喜交々（ひきこもごも）話しかけたりすることが、ごく普通に行なわれている。

年回法要や行事において、故人との交流が行なわれている訳である。このことによって、過去の亡くなった者との対話を通じて、現在、将来への生き方を考える縁（よすが）となってきたのである。（日蓮宗新聞 10月1日号より）

## 話 の 泉

### ◎空の汁椀

肥後熊本の太守・細川越中守重賢が、さる大名の賀宴（祝いの宴）に招かれ、列席の諸侯と歓談を尽くしていたおり、越中守一人何か考えているようであったが、左右に会釈して手水（ちょうず=トイレ）に立ったので、その邸の小姓が案内に立つと、越中守は小姓に小声で「さきほど、予の膳部の汁椀の蓋を取ったところ、中は空であった。膳所の者が、汁を盛ったつもりであったのであろう。

このことが、この家の殿に知れては、その方たちの落度になろう。じゃによって、予は手水にことよせて立って参ったのじゃが、予が復座したら、『お汁が冷めましたと存じますゆえ、取り替えましょう』と申して膳を下げ、改めて入れて参ったがよかろう」と知恵をつけてくれた。

小姓は、ありがたく涙にくれて、越中守が座に戻ると、教えたとおりにしたので、だれにも気付かれずに済んだ。後に、これを伝え聞いた者は、みな越中守の機転と大度（たいど=心の広いこと）を褒め讃えた。

※平成22年度の「地涌の声」の功德主を募集しています。（1月 5,000円）

希望の月と5,000円を添えて、お申し込みください。希望の月が重複した場合は、先着順になります。

